

# DV被害者支援を始めて（全五回）

## 第一回「神様の沈黙？とごほうび」

NPO法人女性・人権支援センター

ステップ 理事長

栗原 加代美

雨の降る10月に夫婦でNPO法人女性人権支援センターステップを訪ねました。コロナ禍の中、閉鎖的空間でのDV被害が増えているという報道を耳にします。また精神的ストレスが増大する現在では、他人事では済まされなくなっている問題の一つではないでしょうか。このDVについて、きちんと理解する必要があると感じ、理事長の栗原加代美さんに原稿をお願いしました。

編集長 大村

### DV被害者支援を始めた理由

ちゃぶ台が叔父によってひっくり返され、用意した夕食のカレーライスが畳の上に飛び散る。母と祖母が、背負い投げでとばされて障子が倒れ、泣き叫ぶ母と祖母の歪んだ顔。この地獄のような風景を見たのは、私がまだ小学6年生の時でした。幼い私にはあまりの恐怖で4人の妹、弟を連れて夕方、田舎の真つ暗な田んぼ道を叔父の暴力が収まるまで、さ迷い歩くのが半年ほど毎晩続きまし

た。その時、父の弟は離婚して私たちの家に身を寄せていました。離婚という人生の負け意識からくるストレスから叔父は毎晩、夕方からお酒を飲み、父が帰るまで母や祖母に怒鳴り、暴力を振るっていました。叔父は「おれは離婚した。人生に失敗したためな人間だ」と話していました。叔父の心の寂しさや辛さが怒りをうむように感じました。

あれから63年たっても、その時の恐怖、悲しみを今も体が覚えていて、怒鳴り声を聞くと体が凍ります。

昭和の山梨の田舎ではよく見られる風景で、決して珍しいことではありませんでした。

恐怖におののいている祖母、母、近所のおばちゃんたちのために将来、何か役に立つ働きに就きたいと、小6の頃から密かに夢を持ち始めました。しかし、そのころ、回りにそのような働きを見聞きすることもなく、その夢は単なる私の願望であり、神様のみこころではなかったのだと、50代

の半ばであきらめかけていました。そのとき、友人の誘いを通して、神様がその願いをかなえて下さったのは、実に43年後でした。神様の沈黙は私を準備させるための時間でした。その間に大学3年生で神様に出会い、また、カウンセラーの学びとして選択理論に51歳の時に出会いました。このような長いゆったりした時間の中で、志を立てさせて実現に至らせるのは神様なんだと、みことばの確かさを体験いたしました。

### シエルター開設

最初は2001年からDV被害者を守る中期シエルターの働きに15年間、関わりました。DVは夫婦間における支配関係をさします。身体的暴力、精神的暴力、性的暴力は支配するための道具です。人が支配されると、どんなに心身共に破壊されていくのかを、まざまざと見せつけられた15年間でした。まさにDVは犯罪であり、人権侵害であることを目の当たりにしました。このシエルターの中での被害者の様子は次回にお伝えしたいと思います。

